

2017 年新春展 「紙で遊ぶ世界—折紙とおもちゃ絵—」の紹介

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

2017 年の新春を飾る展覧会では、「紙で遊ぶ世界」と題して折紙とおもちゃ絵を取り上げた。いずれも紙の素材で、実際に手を動かして造形を作り上げるものである。今回と次回の 2 回に分けて折紙とおもちゃ絵について各々紹介したい。

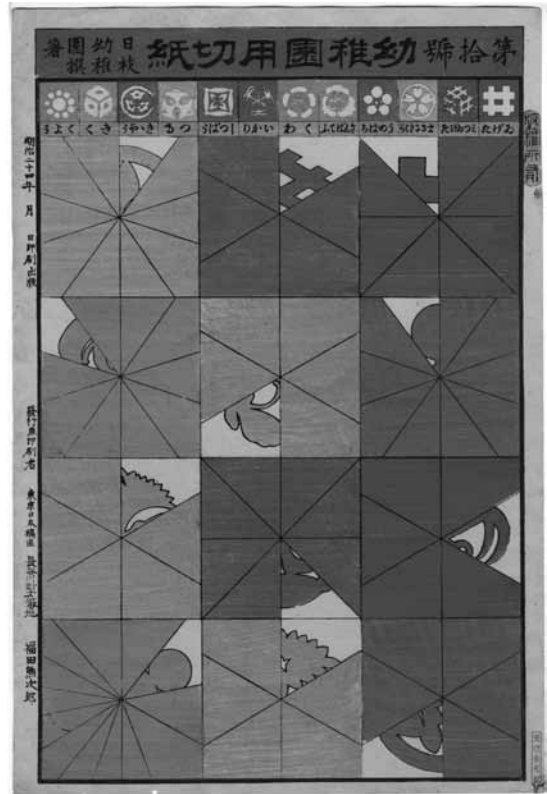
“折紙”、今回の展示では遊戯折紙を指すが、古来より手紙の様式の名称でもある。平安末期から、手紙を書く際に白紙を一枚下に重ねて折りたたんだ。現代でも便箋にしたためたときに一枚で取まってしまうと白紙を加えるのと同様である。この白紙を礼紙という。それをさらに別の紙で包むのが正式の書状となる。現在の封筒が、手紙が第三者の目に触れるのを防ぐ役目を果たすのと同じである。しかし簡略化はいつの時代でも進むもので、紙を横長に二つ折りにしてその折り目を下に手紙を書き、四つ折りにすると外側に裏の余白部分が出てくるため、礼紙が無くとも同じだと認識されるようになった。この最初に二つに折った紙が折紙と呼ばれた。要するに略式の手紙用紙が折紙である。この横長の用紙は短い文を書き連ねるのに便利だということになり、室町時代になるとついにはこれが公文書の様式になった。贈答品の目録にも使われ、「御太刀 一腰」などと書き連ねていく。太刀を贈る場合は銘や作者も必ず記入するので、折紙と共に届く太刀は由緒が明らかな逸品という評価が下された。これがいわゆる“折紙付き”である。手紙の例のように、ものを包む、余計な折り目がついていない清浄な状態は武家の好みに合致し、室町時代以降儀式の飾りなど礼法のなかで“折り目正しい”折紙が発展していった。

江戸時代になると、紙を折って造形物を作り出す遊びとしての遊戯折紙が生まれる。遊びに使える十分な紙と時間を、町人でも享受できるようになったからである。今回、天理図書館から借用展示している井原西鶴の『好色一代男』（天和 2 年刊）に記された、7 歳の世之介が折った“比翼のおりすえ”が文学に現れた最初の遊戯折紙とされている。折紙は上方で先行し、やがて江戸に流行が広がっていった。上方の呼び名“おりすえ”が、江戸では“おりかた”に変化し、幕末には“おりもの”になって明治以降“おりがみ”に統一された。結局、遊戯も、包むという本来の機能を示す名称に落ち着いたということだろうか。

明治になると、江戸時代の“おりすえ”に加えて、幼稚園教育と共に輸入された西洋の折紙の影響も受けて折紙の種類は格段に増えることになる。ドイツの教育者、フレーベルの保育方法が日本に導入されるが、そのなかに折紙も含まれていた。折紙は日本固有のものという誤解が現在も根強いが、決してそうではない。ヨーロッパの折紙は正方形で座布団折から始まるが、そもそも江戸時代の日本に正方形の紙はなく、折紙の際には長方形の紙を切って使った。展示している宮川春汀の「小供風俗 折もの」（明治 30 年刊）に描かれた少女の脇に裁縫鉢があるが、これはそのために使ったものである。その他幼稚園児が扱うには高度に見える切紙細工なども多数刷られ、紙を折ったときの対称性など、折紙が図形を認識するのに役立つ幾何の教材としての働きも期待されていたように思う。初等教育に関わる折紙の展示資料もぜひ会場でご覧いただきたい。

その他、今回の展覧会では当館ワークショップ折紙講座（年

10 回）の講師をお願いしている竹村菊郎氏の作品を展示している。平面の紙から躍動的な立体物が造り出される折紙は子どもだけでなく大人も魅了する。1 月 28 日（土）午後 1 時 30 分から竹村氏による、実際に折紙を使って折ってみる講演会も開催される。



幼稚園用切紙歌川国鶴大判一枚明治 24 年天理参考館蔵

幼稚園は学制に「幼稚小学」として初めて登場する。最初に開設されたのは明治 8 年京都市上京区の公立柳池小学校幼稚遊場だが、本格的なものは翌年にできた東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園である。文部省（現文部科学省）が『家庭教育用錦絵』シリーズを明治 6 年刊行するが、これはその一巻としての園児用図解教材。折紙、切紙両方で幾何を学ばせた。幼児には難解な細かな手先の作業が必要である。



展示風景